

報告書の要約

指定課題に申請する場合は、右欄に『指定』と記入して下さい。

助成番号	研究開発テーマ名	港湾環境のアメニティ評価と創生に関する研究
平成18年2月9日付 第05-5号	助成研究者	氏名 小 河 久 朗 印
	所属	北里大学水産学部海洋基礎生産学研究室教授

研究対象の大船渡湾は閉鎖性で漁場価値が高く、一般市民にとっても潮干狩りなど係わりが深い場所であるが、生活・生産活動による廃水の湾内流入が水環境悪化や漁場劣化の原因とされ、大きな問題となっている。しかし、一般市民を含む当該水域の利用者間にはこのことに対する受け止め方も大きな差があり、環境の評価・創生と云う視点からの捉え方も明確でない。このことを明らかにするために、平成18年度は大船渡湾の水環境の現状、漁業活動、一般市民を含む当該域環境の印象等を把握することに重点を置いて7月にアンケート調査を、9月、11月、1月に現場調査を行い、試料の分析・解析をした。その結果、以下の知見を得た。

- ・ 昭和30年代に始まった大船渡湾の物流拠点化は浅場の埋め立てや人工岸の建設を伴った。浅場は湾口近くに僅かに見られるだけであり、湾の岸は20%弱が自然岸としての姿を留めているに過ぎない。
- ・ 水質は、9月は成層化が進み底層で貧酸素状態が発生していたが、秋季から冬季にかけて改善した。窒素量、CODは調査期間を通して大きな変動はみられなかった。
- ・ 底質は、COD・強熱減量の値は9月が最も高く、秋季から冬季にかけて低下したが、全硫化物量の値は11月が最も高く、特に湾中央部の深いところで高い値が得られ、全硫化物量とCOD・強熱減量とは異なる変動がみられた。硫化物に付いては硫黄の安定同位体測定を行なったところ、硫化物の発生源、時系列的な情報を得るのに有効であることが示唆された。
- ・ 湾内の養殖漁場（カキ養殖筏の設置場所）は、夏季の水質が大きく悪化しない所が選択的に利用されていた。また、養殖棚の深さは昭和50年代を境にして浅くなっており、養殖業業者の経験がそこにみられた。
- ・ アンケート調査については、回答者に漁業従事者が多かったためか水質悪化を指摘する回答が多かったが、一般市民でもこのことを指摘する割合は高かった。このことは、漁業従事者、漁業に携わらない一般市民であるなしに係わらず、湾内の水環境に高い関心を持っていることが窺われた。
- ・ 今回はワカメの配偶体の培養が十分に行なえなかったため、これについては平成19年度に改めて実施する予定である。

平成19年度は、申請書にある調査項目を実施すると共に、平成18年度に行なえなかったワカメの配偶体を用いたAGP試験の実施、漁業者に対する漁場価値の変動について聞き取り調査を進める予定である。